

# A relation between two subfactors arising from a non-degenerate commuting square

—An answer to a question raised by V. F. R. Jones—

佐藤 信哉 (東大数理)

## 1 V. F. R. Jones の問題

V. F. R. Jones は 1995 年 7 月のデンマークでの研究集会において次の問題を出します。まず、次のような有限次元 non-degenerate commuting square を考える。

$$\begin{array}{ccc} R_{00} & \subset & R_{01} \\ \cap & & \cap \\ R_{10} & \subset & R_{11} \end{array}$$

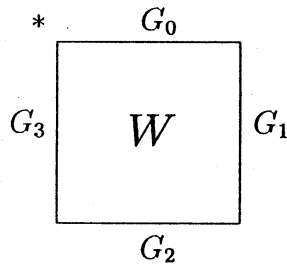
すなわち、 $R_{00}, R_{01}, R_{10}, R_{11}$  は有限次元  $C^*$ -algebra で、 $R_{11}$  は Markov trace を持つとする。さらに、それぞれの inclusion matrix は irreducible であるとする。この commuting square は、周期 2 を持つので、basic construction を繰り返して、次のような周期 2 の commuting square の列が得られる。

$$\begin{array}{ccccccc} R_{00} & \subset & R_{01} & \subset & R_{02} & \subset & \cdots & \subset & R_{0\infty} \\ \cap & & \cap & & \cap & & & & \cap \\ R_{10} & \subset & R_{11} & \subset & R_{12} & \subset & \cdots & \subset & R_{1\infty} \\ \cap & & \cap & & \cap & & & & \cap \\ R_{20} & \subset & R_{21} & \subset & R_{22} & \subset & \cdots & \subset & R_{2\infty} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots & & & & \vdots \\ R_{\infty 0} & \subset & R_{\infty 1} & \subset & R_{\infty 2} & \subset & \cdots & & \end{array}$$

ここで、横方向に basic construction を繰り返すことにより、AFD  $II_1$  subfactor  $R_{0\infty} \subset R_{1\infty}$  を得る。同様にして、縦方向に basic construction を繰り返すことにより、AFD  $II_1$  subfactor  $R_{\infty 0} \subset R_{\infty 1}$  を得る。この 2 つの subfactor には関係があるか？また、一方の subfactor が finite depth であれば、もう一方もそうか？これが V. F. R. Jones の問題である。

この問題を私の論文 [S] で解決した。1 つ目の問いに対しては、2 つの subfactor は同じ global index を持つことがわかった。また、2 つ目の問いに対しては、肯定的な答えを得た。いずれの問題にも、paragroup の手法を用いて解決した。以下、これを説明したい。

まず、上の問題を paragroup 理論の言葉を使って書き直す。 $G_i (i = 0, 1, 2, 3)$  を下の図のように配置された finite, bipartite, connected graph とする。ただし、 $G_0$  と  $G_2$  ( $G_1$  と  $G_3$ ) は共通の Perron-Frobenius 固有値を持つとし、 $G_0$  の even vertex の集合  $V_0$  には distinguished vertex  $*$  があるとする。また、 $W$  を上の 4 つのグラフ上の biunitary connection とする。



これに string algebra construction を適用すると、次のような有限次元  $C^*$ -algebra の 2 重増大列を得る。

$$\begin{array}{ccccccc}
 A_{0,0} & \subset & A_{0,1} & \subset & A_{0,2} & \subset & \cdots \subset A_{0,\infty} \\
 \cap & & \cap & & \cap & & \cap \\
 A_{1,0} & \subset & A_{1,1} & \subset & A_{1,2} & \subset & \cdots \subset A_{1,\infty} \\
 \cap & & \cap & & \cap & & \cap \\
 A_{2,0} & \subset & A_{2,1} & \subset & A_{2,2} & \subset & \cdots \subset A_{2,\infty} \\
 \vdots & & \vdots & & \vdots & & \vdots \\
 A_{\infty,0} & \subset & A_{\infty,1} & \subset & A_{\infty,2} & \subset & \cdots
 \end{array}$$

以下、議論したいのは 2 つの AFD  $II_1$  subfactor  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  と  $A_{\infty,0} \subset A_{\infty,1}$  の関係である。

## 2 Compactness argument と flatness

上で構成された AFD  $II_1$  subfactor の増大列  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty} \subset A_{2,\infty} \subset A_{3,\infty} \subset \cdots$  は、 $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  の basic construction から得られることが知られている ([O3]). さらに、これらの higher relative commutant は、次のように string の言葉で記述できることが知られている。これは、A. Ocneanu の compactness argument と呼ばれている。

**Theorem 2.1**

$$A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty} = \left\{ \begin{array}{c} * \xrightarrow{\text{id}^{(2n)}} \bullet \\ \left. \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right\} z \\ \bullet \end{array} \right\} \text{長さ } k \quad \Bigg| \quad \left\{ \begin{array}{c} \bullet \xrightarrow{\text{id}^{(2)}} \bullet \\ \left. \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right\} z \\ \bullet \xrightarrow{\text{id}^{(2)}} \bullet \end{array} \right\} = \left\{ \begin{array}{c} \bullet \xrightarrow{\text{id}^{(2)}} \bullet \\ \left. \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right\} z \\ \bullet \end{array} \right\}$$

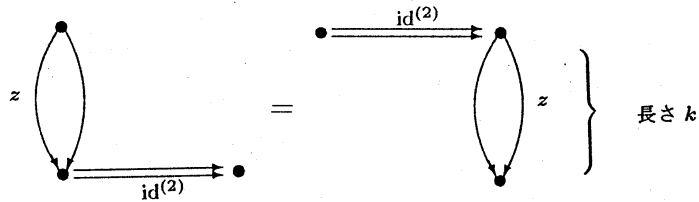
ここで、 $\text{id}^{(2n)} = \sum_{\xi, |\xi|=2n} (\xi, \xi) \in A_{0,2n}$  であり、 $2n$  は  $G_0$  の depth より大きい任意の偶数である。

すなわち、 $A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty}$  は、埋め込んだ後の connection による同一視で形を変えない  $G_3$  上の長さ  $k$  の string 全体で与えられる。

これより特に、次の inclusion が得られる。

$$A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty} \subset A_{k,0}$$

**Definition 2.2**  $A_{k,0} \ni \forall \sigma$  に対して、次の式を満たすような  $z$  が存在する時、biunitary connection  $W$  は、 $*$  について flat であるという。



また、 $A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty}$  を flat part,  $z = \{z(x)\}_{x \in V_0}$  を  $G_3$  上の flat field という。

Flat part については、次の事実が知られている。

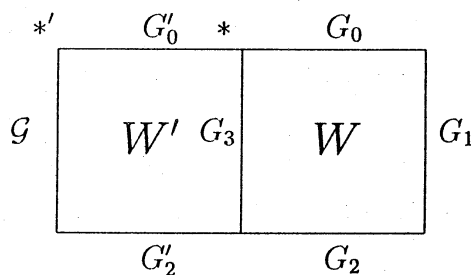
**Proposition 2.3** ([E-K], Proposition 3.1)  $\{A_{k,l}\}_{k,l \geq 0}$  を biunitary connection  $W$  から得られる string algebra とする。このとき、次の図式は周期 2 の commuting square になる。

$$\begin{array}{ccc} A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty} & \subset & A_{k,0} \\ \cap & & \cap \\ A'_{0,\infty} \cap A_{k+1,\infty} & \subset & A_{k+1,0} \end{array} \quad (2.1)$$

この Proposition により、上の commuting square から biunitary connection が得られる。これを  $W'$  と表すことにする。さらに、次の図式も周期 2 の commuting square を成すことがわかる。

$$\begin{array}{ccc} A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty} & \subset & A_{k,1} \\ \cap & & \cap \\ A'_{0,\infty} \cap A_{k+1,\infty} & \subset & A_{k+1,1} \end{array} \quad (2.2)$$

この commuting square に対応する biunitary connection を  $W' \cdot W$  と表すことにする。また、 $\mathcal{G}$  を  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  の principal graph とし、 $\mathcal{G}$  の even vertex の集合  $V'_0$  の元で、 $A_{0,\infty}$ - $A_{0,\infty}$  bimodule  $A_{0,\infty}$  に相当するものを  $*'$  で表す。

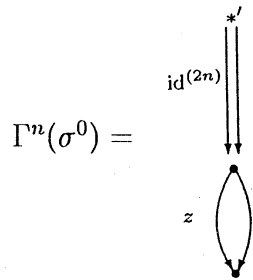


上の記号の下で, 次の主定理を得る.

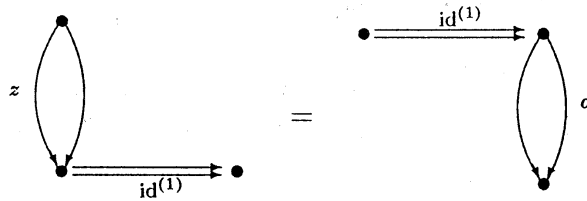
**Theorem 2.4** Subfactor  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  が *finite depth* であるとする. この時, connection  $W' \cdot W$  は  $*$ ' について *flat* である.

**Proof.**  $A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty} \ni \sigma^0$  に対して,  $z(*) = \sigma^0$  となる  $z = \{z(x)\}_{x \in V'_0}$  を作ればよい.

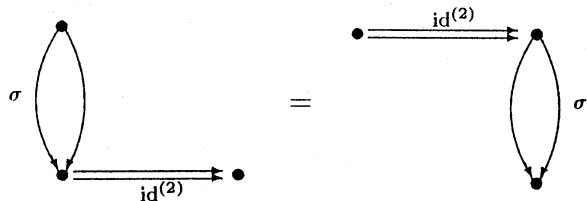
$\sigma^0$  に canonical shift  $\Gamma([O1],[B2])$  を  $n$  回施す. ただし,  $n$  は十分大きいものとする. すると,  $\Gamma^n(\sigma^0) \in A'_{2n,\infty} \cap A_{k+2n,\infty}$  である.  $A'_{2n,\infty} \cap A_{k+2n,\infty} \subset A'_{0,\infty} \cap A_{k+2n,\infty}$  であり,  $\Gamma^n(\sigma^0)$  は  $A_{2n,\infty}$  の任意の元と可換なので, 次の形をしている.



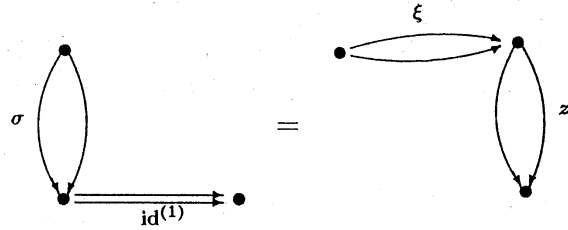
この図に現れる長さ  $k$  の部分を  $z = \{z(x)\}_{x \in V'_0}$  と表すことにする. この時,  $\Gamma^n$  の性質により,  $z(*) = \sigma^0$  である. また,  $\Gamma^n(\sigma^0)$  は  $A'_{0,\infty} \cap A_{k+2n,\infty}$  の元なので, compactness argument により,  $A_{k+2n,0}$  の元と自然に同一視できる. したがって, connection  $W'$  による同一視で, 次の等式が成立する.



さらに, この string を埋め込むと,  $\sigma$  は flat field なのであるから, connection  $W$  による同一視で, 次の等式が成立する.

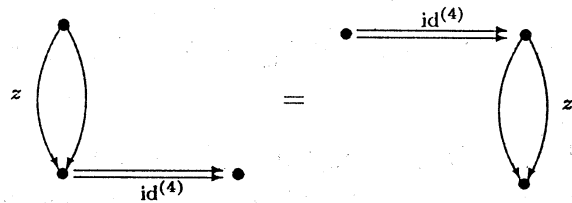


これを再び埋め込んで, connection  $W'$  による同一視で次のようになる.



$\{C_{p,q}\}_{p,q \geq 0}$  を connection  $W' \cdot W$  による  $*$  を出発点とする string algebra とする.  $C_{2n,2}$  において,  $\text{id}^{(2n)} \cdot z$  と  $C_{2n,1}$  の任意の元は可換であり, また,  $e \in C_{2n,2}$  と可換であること, 及び  $C_{2n,2}$  が  $C_{2n,1}$  と Jones projection  $e$  により生成されることから,  $\text{id}^{(2n)} \cdot z$  は  $C_{2n,2}$  の任意の元と可換であることがわかる. ここで,  $\cdot$  は path の接続を表す. したがって, これより  $\xi = \text{id}^{(1)}$  がわかる.

以上より, connection  $W' \cdot W$  による同一視で次の等式がわかった.



すると, compactness argument の証明と同様の議論 ([O3], 33 ページの 11 行目) により, 上の等式から  $z = z'$  が従う. これが示したかったことである.  $\square$

### 3 主定理の応用— Jones の問題の回答

ここでは, 上の主定理の応用として, Jones の問題に対する回答と例を与える.

**Corollary 3.1 (Jones の問題の回答)** *AFD  $\text{II}_1$  subfactor  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  あるいは  $A_{\infty,0} \subset A_{\infty,1}$  のいずれか一方が finite depth であれば, もう一方もそうである.*

**Proof.** 条件の対称性より,  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  が finite depth の時だけを証明すればよい.  $B_k = A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty}$  とおくと, 次の AFD  $\text{II}_1$  factor の inclusion が得られる.

$$B_\infty \subset A_{\infty,0} \subset A_{\infty,1}$$

主定理により,  $W' \cdot W$  が  $*$  について flat なので,  $B_\infty \subset A_{\infty,1}$  の principal graph は元の finite graph  $G_0$  と  $W'$  の horizontal graph  $G'_0$  を繋げたものに一致する. すなわち, AFD  $\text{II}_1$  subfactor  $B_\infty \subset A_{\infty,1}$  は finite depth である. Bisch の定理 ([B1], Theorem 2.6) により,  $A_{\infty,0} \subset A_{\infty,1}$  も finite depth である.  $\square$

次に、もう1つの Jones の問題の回答を与える。

今考えている2つの subfactor の Jones index についての一般的な関係は望めないことは容易に分かる。そこで、Jones index に代わる不変量として次に定義する global index がある。

**Definition 3.2** AFD  $II_1$  subfactor  $N \subset M$  の global index とは、

$$\sum_{M X_M: \text{irreducible}} (\dim_M X_M)^2$$

で定義される実数であり、これを  $[[M : N]]$  と表す。

次の Lemma は bimodule の既約分解を使えば容易に証明される。

**Lemma 3.3** AFD  $II_1$  subfactor  $N \subset M$  が Jones index 有限であり、intermediate subfactor  $P$  が存在すると仮定する。この時、 $[[M : P]] \leq [[M : N]]$  が成り立つ。

主定理とこの Lemma より、次の結果が示される。

**Corollary 3.4** 2つの AFD  $II_1$  subfactor  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$ ,  $A_{\infty,0} \subset A_{\infty,1}$  の global index は等しい。

**Proof.** まず始めに、 $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  が finite depth であるとする。  $B_\infty \subset A_{\infty,1}$  の principal graph と  $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  の principal graph は 共通の even vertex を持つことに注意する。この注意と上の Lemma から、global index についての次の不等式を得る。

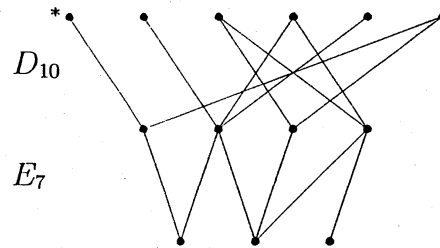
$$[[A_{\infty,1} : A_{\infty,0}]] \leq [[A_{\infty,1} : B_\infty]] = [[A_{1,\infty} : A_{0,\infty}]]$$

対称性により、 $[[A_{\infty,1} : A_{\infty,0}]] \geq [[A_{1,\infty} : A_{0,\infty}]]$ 。したがって、 $[[A_{\infty,1} : A_{\infty,0}]] = [[A_{1,\infty} : A_{0,\infty}]]$ 。

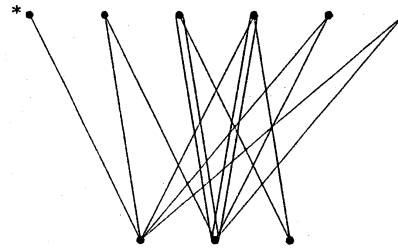
次に、 $A_{0,\infty} \subset A_{1,\infty}$  が infinite depth であるとする。この時、上の Corollary より、 $A_{\infty,0} \subset A_{\infty,1}$  も infinite depth である、これらの subfactor の global index はその定義により、共に無限大である。  $\square$

**Remark 3.5** Flat part と元の  $A_{0,k}$  を繋ぐ horizontal graph  $G_0, G'_0$  は有限とは限らないのであるが、これらが共に有限である時には、上の主定理と同様にして  $W'$  自身が flat であることがわかる。

**Example 3.6**  $E_7$  commuting square を考える。すなわち、4つの graph が Dynkin diagram  $E_7$  であり、その上の biunitary connection を考える。この時、biunitary connection は、同型を除いて2つ存在し、いずれも flat でないことが知られている。そして、この biunitary connection の flat part  $B_k = A'_{0,\infty} \cap A_{k,\infty}$  は、Evans-Kawahigashi([E-K]) によって既に調べられており、principal graph は Dynkin diagram  $D_{10}$  である事が分かっている。元の縦の graph  $E_7$  と flat part の graph  $D_{10}$  を繋ぐ horizontal graph  $G'_0$  は、Bratteli diagram の入りかたから、やはり Dynkin diagram  $D_{10}$  であり、その繋ぎかたは下図で与えられることがわかる。



主定理により, AFD  $II_1$  subfactor  $B_\infty \subset A_{\infty,1}$  の principal graph は上の  $D_{10}$  と  $E_7$  を繋げたものであり, 次の図で与えられる.



## 参考文献

- [B1] D. Bisch, A note on intermediate subfactors, *Pacific. J. Math.* **163** (1994), 201–216.
- [B2] D. Bisch, Bimodules, higher relative commutants and the fusion algebra associated to a subfactor, preprint, (1995).
- [E-K] D. E. Evans & Y. Kawahigashi, The  $E_7$  commuting square produce  $D_{10}$  as principal graph, *Publ. RIMS, Kyoto Univ.* **30** (1994), 151–166
- [G-H-J] F. Goodman, P. de la Harpe, & V. F. R. Jones, “Coxeter graphs and towers of algebras”, MSRI publications 14, Springer, (1989).
- [J] V.F.R. Jones, Index of subfactors, *Invent. Math.* **72** (1983), 1–15.
- [K] Y. Kawahigashi, On flatness of Ocneanu’s connections on the Dynkin diagrams and classification of subfactors, *J. Funct. Anal.* **127** (1995), 63–107.
- [O1] A. Ocneanu, Quantized group, string algebras and Galois theory for algebras, in “Operator algebras and applications, Vol. 2 (Warwick, 1987),” London Math. Soc. Lect. Note Series Vol. 136, Cambridge University Press, (1988), pp. 119–172.

- [O2] A. Ocneanu, "Graph geometry, quantized groups and nonamenable subfactors", Lake Tahoe Lectures, June–July, (1989).
- [O3] A. Ocneanu, "Quantum symmetry, differential geometry of finite graphs and classification of subfactors", University of Tokyo Seminary Notes **45**, (Notes recorded by Y. Kawahigashi), (1991).
- [P1] S. Popa, Classification of subfactors: reduction to commuting squares, *Invent. Math.* **101** (1990), 19–43.
- [P2] S. Popa, Classification of amenable subfactors of type II, *Acta Math.*, **172** (1994), 163–255.
- [S] N. Sato, A relation between two subfactors arising from a non-degenerate commuting square —An answer to a question raised by V. F. R. Jones— , preprint, (1995)